

## 第 43 話<石見銀山>の要約と参考資料

### 第 43 話<石見銀山>の要約

大正時代に、宮崎県内の鉾山が亜ヒ酸に目を向けた背景に、亜ヒ酸の需要の増大がありました。江戸時代、亜ヒ酸は「石見銀山ねずみ取り」の商標で親しまれ、主要な用途は殺ソ剤だったのですが、大正時代に入ると、殺虫剤として大量に使われるようになったのです。

### 第 43 話<石見銀山>の参考資料

#### 4 3 - 1 宮沢賢治の「植物医師」

川原一之「浄土むら土呂久一文明といのちの史記一」 P134~136

宮沢賢治に「植物医師」と題する戯曲がある。一幕もののこの作品は、爾薩待<sup>にきつたい</sup>という名前の男が、植物病院の看板をあげるところから始まる。

「百姓のことなんざ何とでもごまかせるもんだよ」

そう公言する、インチキ植物医師の誕生である。そこへ、根切虫の害で枯れた稲を手に農民がやってくる。相談を受けた爾薩待は口から出まかせの診断をして、最後に、

「虫を殺すとすればやっぱり亜硫酸などが一番いいですな」

と言って、亜硫酸を高く売りつけるのである。

農民が亜硫酸という言葉を目にしたのは、そのときが初めてであった。亜硫酸がどんなものとも知らず、植物医師のいう薬効を素直に信じて喜んで買っていく。しばらくして亜硫酸を売られた農民たちが、次から次に植物病院へ押しかけてくる。

「稲見でるうちに赤くなってしもたもす」

指示通りに亜硫酸を水で溶かして陸稲にかけたところ、全部枯れてしまったというのである。春から汗水流して育てあげた稲を全滅させられて、農民たちは「ひで野郎だ」と怒る。

(略)

いつの時代にも、新奇な商品にとびついて人をたぶらかし、ひと儲けたくらむ小悪人はいるものだ。ここでは亜硫酸が、目新しい商品として登場する。一般の農民には亜硫酸がどんな毒物なのかまったく知られていない時期のこと、みんなころっと瞞されてしまった。

#### 4 3 - 2 三遊亭円朝の「心中時雨傘」<sup>しんじゅうしぐれがさ</sup>

川原一之「浄土むら土呂久一文明といのちの史記一」 P82~84

近代落語の開祖三遊亭円朝の全集に「心中時雨傘」という作品がある。慶応元年(1865)

の実話をもとにした人情 噺<sup>ばなし</sup> である。

火事で逃げ遅れた女房の母親を助けるため、猛火の中へ飛びこんだ金三郎は、はりの下敷きになって体の自由を失う。型付け職人のきき腕がままならず、将来を悲観して自殺を考える。そこへやってきたのが石見銀山ねずみ取りの行商人である。

それと擦れ違って路地口へ、皿に鼠の掛かっている絵がつき、下にねずみとり薬と書いた<sup>のぼり</sup> 幟<sup>のぼり</sup> をつえにつき、石見銀山鼠取り薬を売り歩く行商人がはいってきて、どぶいたの上を幟ざおでコツコツやりながら、

商「いないかな、いないかな……いたずらものはいないかな……石見銀山鼠取り…一服でころりころり取れる……いないかな、いないかな、いたずらものはいないかな」

金「鼠取り屋さん……鼠取り屋さん……」

商「はいはい、お幾つ差し上げます」

金「その鼠取りはよく効くかねえ。どうも<sup>いかもの</sup> 贗物<sup>いかもの</sup> があつてしようがねえが」

商「はいはい、てまえどもの売りますは正真正銘まちげえのねえ、石見銀山から出る鼠取りでございます。一服で根絶やしになります。贗物なんかといっしょになりません。鼠ばかりじゃあごぜえません。犬にでも猫にでも一口食わせば即座にころりと死にます」

金「そうかい、それじゃあ人間にも毒だろうなあ」

(略)

行商人の話にでてくる亥の子のぼた餅は、陰暦 10 月の亥の日亥の刻に無病息災を祈願して食べる餅のことである。石見銀山ねずみ取りを持った手でそのぼた餅を握ったものだから、無病息災どころか腹痛を起こしてしまった。滑稽な挿話の中に、ねずみ取り薬の恐しさがかもしだされている。

そのねずみ取りを金三郎は三服も買った。「友だちに分けてやろう」と言ったのはでまかせで、本当は自殺を覚悟してのこと。その気配を察した女房のお初は、懸命に制止にかかるが、説得できないと悟ると、

「わたしもいっしょに十万億土とかへ行きましょう」

と約束し、2 人で一服ずつ飲んで心中をとげた。

#### 4 3 - 3 石見銀山鼠取り

佐々木正勇 『石見銀山鼠捕』について』

(昭和 54 年度全国地下資源協会合同秋季大会分科研究会資料) より

我が国の文献にあらわれた砒素化合物では雄黄<sup>ゆうおう</sup> と雌黄<sup>しおう</sup> が最も早く、7 世紀末には知られていて、これらの舶来によって国産品が注目されるようになったと思われる。その後、10 世紀初・平安初期には<sup>よせき</sup> 礬石<sup>よせき</sup> の名称がみえ、雄黄や雌黄と共に当時の<sup>ほんぞう</sup> 本草書<sup>ほんぞう</sup> ・医書に

記載してある。礬石については特に毒性が注目せられ、鼠殺しの用途、解毒法、長門国美祢郡に産することなどが知られていた。その後、室町期までに砒石の名が知られ、「本草綱目」や「天工開物」が読まれるようになると、近世には礬石と砒石の異同や、その産地、舶来品と国産品との差異、砒霜・灰毒の製造法などが、本草研究家によって論ぜられた。この頃、長門の長登や石見の笹ヶ谷で造った灰毒は、市場に送られ、医薬・鼠捕・蠅捕・虱の駆除・その他小動物の捕殺、時には殺人等に使用された。江戸方面を市場とした笹ヶ谷産の灰毒は、「石見銀山鼠捕」の名称で知られていた。灰毒・粗製の亜砒酸（俗称）の製造は明治初年にも続けられ、その後暫時衰頹したが、大正年間、世界的需要の増加と共にまた活発となったのであった。

長登産の灰毒が萩の城下や九州方面を市場としたのに対して、本稿の表題とした「石見銀山鼠捕」は江戸で販売した石見産の灰毒のこのようである。その発売元である江戸の吉田小吉が商品名として、有名な石見銀山の名を冠して売ったものといわれる。

この記事（「石見銀山旧記」）によればあたかも石見銀山に砒鉍を産するかのようと思われるのであるが、同鉍山では砒鉍が発見されていない。「石見銀山旧記」の内容は石見銀山に関するもののほかに、大森代官所支配の天領 15ヶ村の鉍山についても記してあって、礬石（毒石）を産したのは、これらのうち石ヶ谷村、十五堂村、畑ヶ迫村であって、石見国鹿足郡所在の笹ヶ谷鉍山が砒鉍産地なのであった。「石見銀山鼠捕」を産したのは石見銀山ではなく、石見銀山領には入っていたが、100km 程も西南に位置する笹ヶ谷であった。笹ヶ谷で製造した砒霜・灰毒は大森代官所へ送られ、更に輸送されたという。

我が国の文献にあらわれた砒素化合物では雄黄と雌黄が最も早く、7世紀末には知られていて、これらの舶来によって国産品が注目されるようになったと思われる。その後、10世紀初・平安初期には礬石の名称がみえ、雄黄や雌黄と共に当時の本草書・医書に記載してある。礬石については特に毒性が注目せられ、鼠殺しの用途、解毒法、長門国美祢郡に産することなどが知られていた。その後、室町期までに砒石の名が知られ、「本草綱目」や「天工開物」が読まれるようになると、近世には礬石と砒石の異同や、その産地、舶来品と国産品との差異、砒霜・灰毒の製造法などが、本草研究家によって論ぜられた。この頃、長門の長登や石見の笹ヶ谷で造った灰毒は、市場に送られ、医薬・鼠捕・蠅捕・虱の駆除・その他小動物の捕殺、時には殺人等に使用された。江戸方面を市場とした笹ヶ谷産の灰毒は、「石見銀山鼠捕」の名称で知られていた。灰毒・粗製の亜砒酸（俗称）の製造は明治初年にも続けられ、その後暫時衰頹したが、大正年間、世界的需要の増加と共にまた活発となったのであった。

\* 礬石：硫砒鉄鉍（FeAsS）

雄黄：鶏冠石（AsS）または硫化砒素（As<sub>2</sub>S<sub>2</sub>）

雌黄：硫化砒素 (As<sub>2</sub>S<sub>2</sub>)

#### 4 3 - 4 石見銀山から笹ヶ谷銅山へ

「山峡のシンフォニー」第 57 回（西日本新聞・聞き書き川原一之；聞き手 中山憲康）

僕は 1985 年 2 月、夏の夜に降る霜の正体を確かめるために、島根県大田市の石見銀山跡を訪ねました。江戸時代に、亜ヒ酸が「石見銀山ねずみとり」として販売されていたという史実を知ったからです。

銀山の資料館を訪ねると、「ねずみとり」自体は置いてありませんでしたが、展示鉱石の説明文に「笹ヶ谷銅山で掘った鉱石から殺ソ剤になる亜ヒ酸をつくって、ここ石見銀山へ送ってきたもので、徳川時代のお家騒動に必ずといっていいほど登場して使われた『石見銀山ねずみとり』の鉱石である」とありました。

笹ヶ谷鉱山は、西の小京都と呼ばれる同県津和野町中心部から約 8 キロのところがありました。驚いたのは鉱山近くにある小学校。ガラスケースに白い粉の瓶が展示してあり、赤いラベルに大きく「ヒ素」と書いてあるではありませんか。ぎょっとしましたが、校長先生が「これは偽物ですよ。本物は金庫の中に保管しています」と、持ってきてくれました。偽物に比べると、本物はツヤがありました。